手に桓公を取れり、其の旨亦味ふべし、〔斲輪〕斲は陟角反、彫斫と注す、卽ち或は凸凹或は方圓或は曲直に鑿り削りするなり、たゞ削るとのみ讀み去りては味淺し、又百器靈轉の活機は車輪に若くはなし、其の製作尤も微妙の伎倆を要するに想到せざるべからず、然らざれば前節の「意有所隨」後句の「得之於手而應於心」等の文字、其義は解すべきも、亦是れ莊子の謂はゆる形色名聲のみ、〔聖人之言也〕前節の首句、世之所貴道者書也、書不過語と相照す、聖人之言也の一語其の尤も重きを書に置く、俗情自ら呈露す、〔古人之糟魄已夫〕魄は粕と同じ、「說文」に曰く糟粕酒滓也と、「辯正」に曰く人死則不能傳其意、而讀之唯讀其言可知矣と、「發覆」に曰く眞醇已去所餔者糟粕而已、と兩解宜しく合着すべし、而して夫の字は輕き嘆辭なり、故に此の句口氣銳きに似て、亦自ら婉なり、〔斲輪徐則甘而不固、疾則苦而不入〕成疏は司馬彪に依り、甘緩也、苦急也として、斲輪失所則牢固と云ふのみ、然らば牢固ならざるは所を得たるか、解說頗る明透せず、故に他本多く林解に從ふ、林氏曰く甘滑也、苦澁也、徐寬也、疾緊也、寬則甘滑易入、而不堅、緊則澁而難入と、然れども文義を置きて實を視れば、寬と滑と、緊と澁と殆んと一曲折を存せず、且つ本文徐疾と甘苦と其の別明かなるに、林氏の寬緊、成疏の緩急は殆んど混同して、人を迷はしむるに足る、今按するに丁寧に削る、故に徐と謂ふ、而して自ら少しく削り過ぐる意あり、雜ッと削る故に疾と謂ふ、而して自ら削り足らざる意あり、削り足らざる故に苦澁にして入り難く、削り過ぐる故に甘滑にして堅固ならざるなり、卽ち徐疾は斲輪の手加減内にて言ひ、甘苦は材料其の物の配合上にて言ふなり、〔有數存焉於其間〕案ずるに數は甘苦の數なり、其間は不徐不疾之間なり、此の句、焉字の据る樣頗る奇異なり、岡松甕谷云ふ、猶言於其間有數存焉と〔古之人與其不可傳也死矣〕也字の用法も亦奇異なり、宣穎曰く猶者と其不可傳也とは、卽ち意字を變裝せしめたるまでなり、然れども又意の傳ふ可からざることをも兼ね言ふ、此れ亦例に依つて頗る奇筆を弄せり、

名言

故萬物成、帝道運而無所積、故天積、故海內服、

准、大匠取法焉、

王事者責矣、

人非無物累、無鬼責、

呼我牛也、而謂之牛、呼我馬也、而謂之馬、

夫道於大不終、於小不遺、

世因貴言傳書、世雖貴之哉、猶不足貴也爲其貴非其貴也、

莊子國字解上 終

柏酒滓之唯讀其言者糟粕而已、と雖は輕き嘆辭なり、如婉なり、〔新論徐則〕司馬彪に依り、甘緩也、固と云ふのみ、然るに解說頗る明透せず、く甘滑也、苦澁也、

大正三年七月廿五日印刷
大正三年七月廿八日發行

（漢籍國字解全書）

編輯者　早稻田大學編輯部
發行者　早稻田大學出版部
代表者　高田早苗
東京府豐多摩郡戸塚町大字下戸塚五十八番地
印刷者　渡邊八太郎
東京市牛込區榎町七番地

發行所　早稻田大學出版部
東京府豐多摩郡戸塚町大字下戸塚五十八番地
振替東京一一二三番　電話番町二四二三番　三七四番

日清印刷株式會社印刷

大日本出版會　不許複製　早稻田大學出版部

316
137

終